



私は教師をしておりましたが、ある時、留学生が日本語について質問をしてきました。『ひにちについてですが、二日(ふつか)、三日(みっか)と言うのになぜ一日を「ついたち」というのですか?』この質問に私を始め、周りの人々は誰もこたえることができず、私の元に質問をしに来ました。私はじゅうぶん説明をいたしました、日本人としてはこれではいけないと思いました。この事がきっかけとなり、私の「言語」へのこだわり(?)が始まりました。

たとえば、「ワイズソング」の歌詞で、「捧げつくさん」と「胸にあふれん」とありますが、この二つの「ん」は意味が違います。「捧げつくさん」は「意志」を表し、「胸にあふれん」は「推量」を表しています。日本人は語源に無頓着です。なぜそう言うの?と考えると、日本語には奥深い歴史や背景があるのです。今日はそんなお話をしていきたいと思います。

1. 「家」「いえ」ですが、昔は「いへ」と書きました。た。「い」は座っている場所で、「へ」は「入れ物」という意味です。座って雨風を凌ぐところという意味になります。「鍋」は「なべ」ですが、「な」が、食べ物で「べ」は同じく入れ物ですから「食べ物をいれる物」となります。「俎板」「まないた」ですが、「まな」は「魚」を意味します。「俎板」は魚を料理する板となります。別の言い方で「菜板」「さいばん」という言い方がありますが、俎板と菜板の区別は、現在はないようです。昔はもしかして魚のおいが野菜に移る事がいやで、使い分けていたのかもしれない。

2. 「ござ」と「畳」の話。「ござ」の「ざ」は座る所です。土の上に直接座っていた時代があります。一般の人が座っていた所へ、地位の高い人がたずねて来た時、わらで編んだ敷物の上に座ってもらいました。これを「ご」と言う尊敬の意味を付けて「ござ」と言いました。生活レベルが向上してくると一般の人でも普通に「ござ」を敷くようになり、そこにまた地位の高い人が来ると、今度は大きな「ござ」を畳んで座ってもらいました。これを「畳」「たたみ」と言うようになりました。

3. 「引き出物」と「熨斗」「のし」の話。「引き出物」はおなじみの冠婚葬祭のおみやげ「引き出物」です。平安時代に天皇家のお祝いがあった時、参列したお客さまに振舞った引き出物は、一般的には「かずけもの」と言って反物が多く用いられました。貰った

人は担いで帰ったものですから「かずけもの」といいました。当時最高の引き出物としては「馬」がありました。天皇(帝)が言いました「厩から馬を引き出してまいれ」馬を引き出して与える、つまり「引き出物」という訳です。「熨斗」は、「のしぶくろ」や「のしがみ」などに使われる言葉ですが、「のす」が語源です。「のす」と言うのは「圧力をかけて伸ばす」ことです。「イカをのした」のが「のしイカ」、昔アイロンに炭火を用いていた時代はアイロンを「火のし」と言っていました。ここで言う「のし」とは「あわびをのしてお祝い品に貼った」のです。「のしあわび」です。非常に貴重なもので、いつでも手に入るものではありませんから、絵にかいて貼ったのです。これが現在の「のし」になっています。

4. 「駆けつけ三杯」と「順流る」「ずんながる」の話。宴会の席に遅刻したとき用いる言葉で、現代はお酒の量を追いつくというような意味で使われていますが、その昔の宴会では帝から順に杯を回して飲んでいったのです。これを「ずんながる」言います。3回ずんながると今日の宴会は終了となりました。「遅れてきた者は続けて3回飲みなさい」という訳で「駆けつけ三杯」となりました。遅れてきた人が三杯お酒を飲むと、もう宴会は終わりなのですね。

5. 挨拶用語「ありがとう」の話。感謝の気持ちをこめて「ありがとう」といいますが、「ありがたい」という言葉が出来たときは「感謝」の気持ちは全くありませんでした。枕草子にはこの様に書いてあります。「ありがたいのは姑に誉められる婿の君」、つまり「有り得ない事」のたとえなのでした。他人から親切に助けてもらったとき(買い物や食事の支払いに困ったときとか)にめったに無い事の例えで「有り難し」「ありがたし」と表現したのです。「助けていただいて感謝」の気持ちを「ありがとう」と言ったのです。

6. 「かしこ」の話。女性が手紙の最後に書く「かしこ」ですが、これは「かしこまって申しあげます」の意味で、「かしこまる」の事です。「かしこまる」とは、「賢い人」の前で身がすくんでしまう事を「かしこまる」と言います。この上の部分を取って「かしこ」と言います。「おそれながら申しあげます」という意味で「かしこ」を用いています。とすれば、女性限定で使っているこの言葉は「男尊女卑」の名残の言葉でしょうか。

7. 「こよみ」「ついたち」の話。昔は「かよみ」と言って、二日、三日、四日などの日にちを読むものとして「かよみ」と言いました、月の初めと終わりに意味を深く置いて、「今日から月が立つぞ」の意味で「月立ち」、これが「一日（ついたち）」の語源です。晦日は「月がこもる」の意味で「つごもり」と言い、12月の「つごもり」を「おおつごもり」と言いました。

8. 「女性の名前 子」「男性の名前 輔」の話。昔は、男性でも「子」の付く名前はありました。小野妹子は有名ですね。中国では偉い人に「子」をつけて「し」と読みました。「孔子」「孫子」などですね。ここの「子」は「先生」という意味です。この意味で日本に伝わりましたので男性でも「子」が付いたのです。女性を尊敬するようになり「子」を付け始めました。始めは名前の下に「子」をつけて「子さん」、「よしこさん」と呼び始めました、「よしこ」さんの名前は「よし」さんだったのです。これは敬語ですね。昔、女性の地位が向上した証拠でしょう。男性の「輔」には（大輔さん、則輔さん等）歴史的な意味合いがあります。戦前までは、地方の知事は中央から派遣されていました。「国神」又は、「国守」「こくしゅ」と言いました。地位の順位は、長官（かみ）・次官（すけ）・判官（じょう）・主典（さかん）の四等官でした。地方のトップは「すけ」が行うようになり、命名のとき「神」と言うには恐れおおいので、実力トップの「すけ」を付けたんだろうと思います。「すけ」の字はいろいろ有りますが、音が同じなので意味合いは同じと言っていいでしょう。

9. 「食べ物の話」「ジャガイモ」、ジャカルタにあった芋が伝来したとき「ジャガイモ」と伝わりました。「メイクィーン」は「5月の女王様」の意味で「May Queen」です。「かぼちゃ」はカンボジアから伝来で「かぼちゃ」です。「果物」は「木だ物」「きだもの」が語源で、木に成る物という意味です。

いろいろお話してきましたが、語源を理解して外国人に質問されても良い様に知識を蓄えていきましょう。

(もりおかクラブ:2010年3月例会卓話)